

# 構造人類学の方法\*

～ 橋爪大三郎 ～

0	はじめに	1
1	社会理論の課題	2
2	構造主義概観	7
3	『親族の基本構造』	10
4	構造主義の特性と限界	27

0 レヴィ=ストローズは、すでにあまりにもよく知られた人物であると思われるが、その仕事の内容は、あまり理解されていない、と言っていい。これは大変に残念なことである。一昨年、『親族の基本構造』の邦訳が出版されたので、これを契に彼の仕事が社会科学研究者に大きな影響をようやく与え始めるのではなからうかと思っただ、どうでもなれようだ。彼が賞られる理由、その主旨がハルピも、人類学の新語や民衆誌的な事実に鮮やかなように固められているせいもあるが、より根本的には、むしろ専門家であるはずの彼の紹介直訳者らが、彼の仕事の「本質」をとらえていないためではないか、と考えたほうがよいようである。今風の邦訳の端々にも、それがうかがわれる。

そこで、この報告では、初期のレヴィ=ストローズの主旨である、『親族の基本構造』をとりあげ、そこで彼が駆使している構造的手法の秘密を、描き出す

\* この報告は、林室直樹氏の主宰する自主ゼミナール「外空ゼミ」の、上級コースで発表するため、まとめたものです。

ことを試みよう。邦訳本や解説書を読めればわかることは、極力回避し、彼の仕事をどのくらい「幸福」においてだけ語るようにつとめる。この報告で明らかになるはずのことは、彼の後期の主旨、『神話学』4冊にもあてはまるばかりか、緻密なみづの「構造主義」の作業にまでこのくらい相当するであろう。

1 さて、本題へ踏みこむまえに、いったん立ちどま、こゝのゆれゆれが、いかにいいかなる課題意識にたって、いわゆる構造人類学なるものをつつきかえようとしているのか、ともに確認しておいた方が、よいであろう。『親族の基本構造』は、密林の奥や砂漠の涯にひっそりとかく住み、野蛮な未開人たちの生態だけを、こと細かに素材としているというのではなからうか？ 滅びかけている、あるいはもう崩壊してしまった彼らの生活に関する知識から、ゆれゆれは、いったいなにを期待できるというのか？ そんなひまに、他にすることはないのであ？ ———ところがどっこい、そのようなことはない。

ゆれゆれ社会科学者の目標は、社会に関する有効な研究をすすめることにあつた。そして、その目標の理論的課題は、記述的に妥当な社会理論を構成することだ。この課題は、じゅうぶん困難であるが、いくつかの成功例から、参考とすべき理論の要諦を学ぶことができる。そのような成功例のうち、もっとも注目してよいもののひとつが、構造人類学であり、その代表著作が、レヴィ=ストローズの『親族の基本構造』なのである。それゆえ、それを「方法の書」として読むことが、有益であるだろう。

1.1 この点について、さらに敷衍してみよう。

いま、記述的に妥当な社会理論を構成することが社会理論の課題だ、とのべた。ひとくちにこのべても、わかりづらさと思ふので、これをもっと分解してみよう、どうすれば、いったいどの辺が社会理論の困難さの核になつてい

のかか、だんだんはっきりしてくるはずだし、どういうところを見做せばよいのかもわかってくるだろうから。

理論を仮説演繹的な体系と考えば、それが社会現象に関して記述的に妥当であるとは、たぶんつぎのようなことをいみするはずである：

- (1) 記述が妥当であるかどうかを判定するための根拠となる、外部基準(記述の目標)が、確定すること。
- (2) 記述を、主張の内容及び明確であるような言明の体系(=理論)へと組みあわせること。
- (3) 理論から導出された諸帰結を、外部基準と照合すること(=実証化の手続き)。

ここで、(4)は、理論家が、その社会現象とはどのようなものであるかを、明示的につかむことを、必須の前提としている。(2)はさらに、つぎのように分かれる：

- (2') 社会モデル(=記述のために前提された仮説モデル、ないし公理系)を、設定したうえで、
- (2'') そこから論理演繹的に導かれる諸帰結、諸命題、諸定理(=モデルの挙動)とその含意を、(ひとつのこらず)明らかにする。

これは、誰にとってもま、たか明らかに肯とされるような、あたりまえのことからである。問題は、これが(いざとりかかってみると、一般に)ち、ともうまくいかな(= (1)、(2)、(3)がさっぱり噛みあわない)ことであって、たとえば社会学では、(2)と(3)(=「理論」と「実証」)が分断されるという、有難くない状態がつづいている。

では、これをどう克服するか？

これを実証の側からま、克服することは、ありえないことである。ただやみくもに調直をつみ重ねればよいのなら、いまごろはとうに問題は解決しているはずだろう。中野の理論のような、実証から理論へ上向しようとする奇怪な工夫によっても、この事情はいささかも変わらぬ。それゆえ突破口は、理論の側でみつければならぬ、理論的課題が理論によって解かれるしかないのは、明らかである。

こと理論に関しても、(ゆくと社会学領域に関する限り)見るに値する理論が存在していないというのが、はなはだ恐ろしい現状である。とはいえ、いわゆる構造-機能分析の立場に、検討してみてもよいいくつかの試みがあるが、それはたぶん、つぎのような問題をかかえているだろう。概して言えば、これらの試みにおいては、理論が自分を構成する場合の基準、課題意識が、明確になら、ないものである。それゆえ、これらの試みは、やみくもな一般化によって特徴づけられることになる。わが国における構造-機能派のビッグ・スリーは、宮永健一、吉田茂人、小室直樹であるが、宮永がParsons理論の紹介者としての自覚に比較的よく従っているのに対し、後二者にはどうした傾向が顕著であるように思う。たとえば吉田茂人は、一般機能論、自己組織系の理論、一般記号論、……のなかに、Parsons派のAGIL図式におさまりきれない自己の理論的立場の表現を見出しているが、このような普遍化が社会領域と非社会領域との区画に無頓着であることゆえに成立しているのは、明らかだ。(そのため、吉田理論の主要な作業は、日常的・常識的な視角でとらえられた社会的出来事を、より一般的な概念枠組みに対応する語彙におきかえることによって占められることになる。) ゆたしはかつて、このような試みは、つまりところ、構造-機能理論を論理的な不整合に導くことになるであろう(= (2')が矛盾をみだしてしまおうであろう)、と指摘したことがあり(橋爪【1977】)、更に志田基与師の行った報告も、同じ点を衝くものであった(志田【1979】)。しかし、ここでは言ひえをかえて、つぎのようにのべておくべきかもしれない——社会モデルを、「実質的な普遍性」\*を具えたものとして、モデル化するべきであること。

\* 実質的普遍性(substantive universals)とは、もともと理論言語学の用語であるが、ここでは用法をずらしてもちいている。

吉田理論は、社会を制御メカニズムとしてとらえるのであるが、このような仕方が社会の自覚性をとらえたことにはならないであろう。制御理論は、あらゆる制御メカニズムを対象とする、汎用モデルを与えるのであるが、理論に以てのような汎用性は、むしろない方がいい。なぜなら、汎用性のある理論は、個別の対象を、実質のない普遍性においてとらえているにあらず、空虚な、形式的普遍性においてとらえているにすぎないからである。(この形式的な普遍

性は、さしあたり、理論家の恣意と普遍化性向のうちにはその根拠をもっていない。

AGIL図式は、ある実質的な普遍性に関する主張であった。この図式はむしろ難点にまみれているが、そこから出ていくことにより、若田理論ほかによって実質的な普遍性とも手離してしまつたようにみえる。この傾向は、若田理論とはまた異なる方向へ自己展開をとがつつあるかにみえる。小室理論においても、顕著に指摘できるようである。小室流の構造-機能分析が、もしたんに論理的な分析用具(Logical Tool)、システム的な思考法(Systematic Way of Thinking)を与えるにすぎないのであるとするのは、それは、理論としての性格のきつめこうすいものとなつてしまうであろう。(2)とまりはなさいた(2)は、理論というよりも論理である。それはたしかに不可欠であるが、社会に関する実質的な普遍性を含みえない。実質的な普遍性をとらえた社会モデルを構成するのに益するのではないは、「学際的な」且配りのなかからきびうることはいさう多くなつて思ふのであるが——

しかし、これらの点は、本日の主論点ではない。われわれが論じたのは、適切な社会理論を構成しようとするときの洞察をいかにうるかであり、そのための参考となりうる、理論的試行の1事例なのであるから。

1.2 社会現象に関して成功した理論とみなされるもの——それは、(近代)経済学(とりわけその一般均衡理論)、理論言語学(とりわけ変形生成文法)、そして今日検討する、構造人類学、の3つであるだろう。とわたしは考えるのだが\*、これらの理論には、ある共通の特徴があるとみられる。その特徴とは、巧みに実質的な普遍性をもつようなモデルを構築しおこなっていること、しかもそれは、社会の局所性と全域性とをうまく接続させるような社会モデルであること、である。(この、局所/全域という両概念の意義については、橋爪[1979]を見よ。)

\* このような例示の仕方に対しては、おそらく、心理学はどうなっているのだ、等々の異議がありとよう。心理学(行動主義)は、社会理論として

としての構成と射程をとらえていないので、はじめから除外してある。また、教育学、政治学、宗教学のたぐいは、理論的にいって問題にならない。また、社会人類学についていえば、これを機能論的アプローチと構造のアプローチとに分けてとりあげたのがみよひょう上選ばれるので、独立して扱われなかった。

構造人類学の理論的特性を選んだため、このふたつの理論のモデルについて、あらかじめ言及しておくでしょう。

経済学の代表的なモデルは、社会と、おのれの効用をとらえた諸個体からなる競争市場として描きだすような、限界効用モデルであるが、経済理論にとって有効であることは、このようにモデル化される経済空間が、基本的に言って、線型性をとらえていることである。経済学には、検討問題ないし合成問題と呼ばれるテーマがあり、個体に関して成立する局所的な命題から市場ないし社会に関して成立する全域的な命題を導出する可能性が、検討される。効用(ないし望好順序)に関しては、固知のように、合成可能性は一般に成立しないが、価格-数量タームでは、検討が有意義であると考えられ、その結果、多くの経済学的命題に関して、局所から全域への拡張可能性が保証されることになる。経済空間では、局所的な性質と全域的な性質とが同型的であるのだから、ラフに言って、線型的な空間だとみなせるわけである。もしこのような性質が足りたをなくして、恣意に行動仮定を設定しても全域(市場)に関する有益な命題がみちびけないのであれば、経済理論はほとんどいみがないカラクタ(empty box)にすぎないといつても可いだろう。

言語学の場合には、どうだろうか？ 言語活動というのは、徹底して社会現象であることは明らかではあるが、言語の生成モデルは、そこに巧妙な抽象の準位をもちこむことにより、言語活動が社会的な相互交渉として営まれるという側面を抽象してしまつた。この理論が想定する主体、経済理論が「経済人(homo oeconomicus)」として想定しているのにちゅうと匹敵するようないみで言語理論が想定する行動主体とは、「理想的な話者-聴者(ideal speaker-hearer)」であるのだが、その主体は、その外にもたがも社会関係をもたな

のような、一種のマクロ・アクターだといえる。括弧-聴音とは、自己矛盾した、ありえない存在音であるが、そのような設定の背景には、そのような抽象がひかえてある——つまり、ここでは、言語は、規範としてだけとりだされてあり、社会過程として営まれるという側面は、まったく無化されているのである。(なお、付言すれば、生成文法モデルは、判型モデルの体裁をとっているけれども、それは、このように抽象された言語(規範)を生成するための抽象的な装置なのであって、決して、あれこれの発話や受話の際に生体陰構のなかに実際にはたらく過程と無関係であることに、注意しよう。)

構造主義、むしろに構造人類学が、どのようにこれに好対するものであるかは、あとで詳しくのべよう。

社会というのは、それなりの性質をとる人々が多勢あつまってきたちづくる、ひとつの秩序である。だから、このような社会を対象とする社会理論が成功するひとつの必要條件は、局所/全政の関連を、明示的に示すものであること、だろう。これがうまくいけば、局所的な仮定から全政的特性をみちびいたり、その逆を実行したりする、という理論的なうまみもでてくる。(Pansons流の構造=機能分析は、そのAGIL図式によつて、かなりやみくもに、全政的社会システムも、小集団も、主体システムも、すべて同型であると仮定されるようだが、社会がどのように無際限に単体分割される空間だと考えられてしまえば、たちまち明瞭な有理につきあつてしまふはずである。)

2 構造主義というとなにか偏在のしれない秘教じみた宗派、あるいは、反人間主義を標榜する末期症状的なスルゴウワ思想のなれのこころ、はたまた、やたらセンセーショナルな時代思潮のファッションの如くに、ひょっとすると考えられてしまふむきもあるかもしれない。(文として構造主義の旗振りをしていく当人までもが、どう思っているにいたりする。)しかし、それは、まったくの

誤解か無理解である、と云うべきだろう。実は、構造主義とは、とても簡単なこと、きわめて素直な研究法のふところにほかならないのである。

2.1 まず、「構造」というのがどのような概念であるのか、理解しよう。どうすれば、構造主義的なアプローチによる社会研究法の特徴が、容易に把握できるであろうから。

わたしの考えによれば、たぶんつぎのような定義が、簡明・適切であると思う：

(\*) 構造とは、ある特定の<sup>変換</sup>(ないし<sup>変形操作</sup>)に関して、不変なもののことである。

この定義は、日常的な用法にいゆる構造のとらえかたとは、ややへだたりがあるが、それをある仕方で一般化したものである。(\*)の定式のなかで、変換や、その変換が施されるはたの対象を、特定することによつて、それがなにの構造であるかが、明示されることになる。わたしの理解する限り、すべてこの(まづのような)構造主義の理論的作業であれば、\*みなこのような定式化にしたがっており、それゆえこの定式によつて解釈できるはずである。

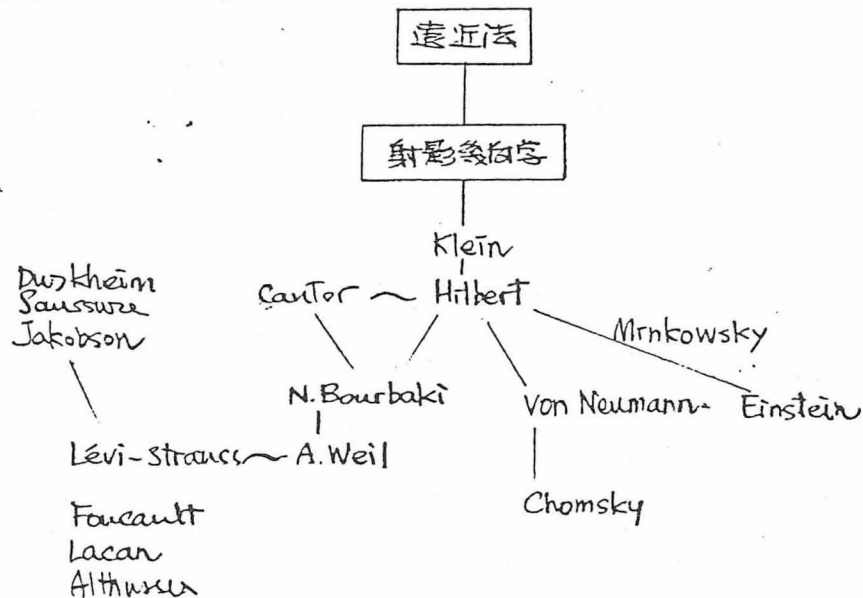
\* アメリカ構造言語学派は、しばしば構造主義の名称により言及されるが、ここでいう構造主義とはむしろ好極に位置するものであるから、注意のこと。

2.2 さて、上の定式(\*)からいきなり問題にたちいるよりも、その発想の淵源にさかのぼつて、構造主義諸潮流の展開を見渡しておくほうが、多少わかりやすいであろう。フランス構造主義派をさかのぼると、そこにSaussureの仕事とさぐりあつてることができすが、眼を言語学からさらに西歐の知的伝統全体に広げるならば、構造という発想が、決して偶然の創意ではなく、むしろ必然の如くに育まれてきたことを知るであろう。とりわけわかりやすいが性自ずからは数学分野である。Bourbakiグループ(これは、Lévi-Straussともきわめて深い関係にある)の中心的な概念のひとつが、「構造」であるが、このような

抽象と洗練の仕方は、Hilbertら Göttingen 学派の公理主義(axiomatism)の流儀をくむものである。この公理主義がまたさらに、つぎのような背景をもっている——すなわち、絵画における遠近法の完成は、意識における主/客構図の成立と、ちょうどうらはらう出来ごとであった。遠近法の技法は、やがて射影幾何学どうみだす母胎となるが、射影幾何学こそは、特定の視座(主観のありかた)に依存しない対象(より抽象的な存在であるような、客観)をとりあつかうための、手続きを与えるものである。たとえば、Göttingen における、Hilbertの上席教授 Klein が、若くして、幾何学のプログラムをなすつがめのように宣言したとき、彼は構造主義の序人のまかかたに立っていたのだ:

《空間  $R$  と、その上に動く ( $R$  を  $R$  自身の上に移す) 変換群  $G$  とが与えられたとき、 $R$  内の図形の性質のうち、 $G$  のどの変換によっても変わらないもの、すなわち各図形について変換群  $G$  の不変量を研究するのは、 $(R, G)$  幾何学である。》(Klein [1872=1970:330])

ここから構造主義までの道のりは、序人のひとまたぎである、と言っている、上の定義において、(空間  $R$ , 変換群  $G$ , 図形, 不変量, 幾何学) を、たとえば、(対象領域  $R$ , 変換手続  $G$ , 個々の対象もしくはデータ, 構造, 構造主義) によって置きかえてみれば、これはそっくりそのまま、構造主義の定義になっちゃうのだから?



集合論の登場によって、代数学と幾何学とのあいだの垣根がすっかりとりばらぬいてみると、諸々の(一見異なる)数学的対象が、つまるところ、同一の構造をなしていることが、ますます明らかとなり、そのようにして整理がすすめられていった。これらの数学的対象が、諸々の外見にもかかわらず、ある変換によって不変な性質、共通の構造を隠し持っているとは、おそらく、これらの背景に、同一の論理のメカニズムなり思惑のパターンなりが控えていることを、推測させるに充分である。

構造主義が、たんに数学上の一派たるにとどまらず、今日ひろく文化科学一般の指導原理(のひとつ)たりていているのは、それが、人間のうみだすさまざまな表現形式の、外見的な多岐の奥底に一貫する、普遍性(universals)を抽出、記述する手続きを与え、そのようにして人間性のありえを明元的に解明する方法的根拠を提度した、ということに、因っている。(特に、近代の自我に対する懸念が、Freudism や Surrealism という形でまぶあらぬい、ある土産をかたちづけていたところだ。この方法はひろくうけいれられている。) 神話研究にせよ、記号学にせよ、文学理論にせよ、モード、絵画、その他いかなる領域での研究にせよ、構造主義が方法としてもつ意義は、本質的に同一である。ポイントだ、ここでいかなる変換操作をつおえば、構造をえぐりだすことができるか、と問いを發見することなのだ。

3 レヴィ=ストロースが自分の最初の研究を序人とかまとめ上げようとしていたとき、彼はこのような構造主義の方法に決して自覚的であつたわけでもない。むしろ彼は、そのような方法がととも(教育的な対象以外の対象についても)可能であることを示した。創始者であると言った方がいいだろう。(レヴィ=ストロースよりさらに、Troubetzkoy や Jakobson など、アラブ学派の音韻論研究者たちが、Saussure の影響下に、事實上これにひとしい仕事をなしとげていたのが、推しの前例であると言えは言える。しかし、作業の困難さの度合もさや、明らかにレヴィ=ストロースの場合の方が、教壇上であつた

3.1 『親族の基』も編纂の準備期間中、1935年から1940年のころにかけてと前期はほぼ同じ。このころレヴィ・ストロースは、親族研究に關して著った『親族の基』を出版する。編纂もかなり進んでいた。すでにのべておいたように、レヴィ・ストロースのこの1冊に注目する親族論の「たのしみ」——ひょうは構造主義の方法で、どのようにして親族領域にもちこみ、適用しているか、ということ、そしてもうひとつは、その試みが、社会の層階性と全統性とを、いかに関連づけ、社会理論としての成功をもたらしているのか、ということ。この成功のうえに、後の「構造人類学」の構想が組み立てられ、後年の神話研究も準備さいるのである。

『親族の基』という本は、たしかに、あまりにも素晴らしい書物である。多分読みとおすだけでも驚きを感じることもおぼたらしい。とこでその種類だけをつかみだして、呈示するがよがる。それには、レヴィ・ストロースをとらえた課題状況を、さきの Klein の定式にならぶように整理してみるのが、たいへん手取りにやい。

また『親族の基』は、親族領域、可なり、親族の開示する。これをこのた血縁的存在のなりたちや、婚姻のあり方を合し、たしかに社会生活の領域である。(通例、いわゆる「玉置」社会には、たしかに、親族の形成といふわけでは、社会生活として活動している。) ただし、あとで述べられるが、彼はとくに、いわゆる基構をもつような社会(→婚姻の型が、血縁関係によって指定され、いはば社会構造の関数として定まるような社会)に、考案の對象を限定している。このため、扱われているデータは、オーストラリア、東部アジア、中国、南洋、インドあたりと限定され、アフリカ、ヨーロッパの諸社会や、アメリカ大陸の事例は、さしあたり検討の枠外に、おかれることになった。

つぎに、その領域に外見ゆき多様性を与えているものについて、考えなければならぬ。これは、よく考えてみると、その多様性のなかにひそむ「構造」

をつきとめる作業によって、やはり両方おさめられる当のものがあることかわかる。そのゆえにこれは、最終的解答として、さしあたり民族誌の複雑たる資料の山のなかに、なおまきまいておくことになる。

親族の對象もしくはデータは、当然にも、各地での調査報告をついて、種々さまざまな親族現象である。ゆえには、現代社会の諸現象の因をもつてするから、奇怪な異相が、ゆえのゆえから、ゆえゆえの現象をくり返すように、映るだろう。ある社会は、原始的であるがゆえに、ある社会は、原始的である。またある社会では、一天多妻制であるがゆえに、別の社会では一妻多夫制である。云々。もしこれを単純に比較して、その共通点を探ろうとするなら、たぶんいかなる興味ぶかい共通点も見出せない。ちがいない。ゆえに、系群の比較方法論をもつてして、取って、能のない分類学(taxonomie)におゆるか、あるいは怪しげな逆に図式にあらわすをほおりこんでしまうかするのが、せいぜいのところであった。

そのほか、親族領域には、よくわけのわからない現象が、いくつが知られてきた。レヴィ・ストロースは、これらにも、一貫した原理によって説明を与えることになるのである。その第一は、近親婚禁止(ならびに近親婚禁止)の普遍性であった。この存在理由については、論議があったが、親族領域でどのような見をもつものであるのかについて、決定すべき説明を与えるものではなかった。第一には、ある種の婚姻(たとえば交又イトコ婚)を、他の婚姻よりも選好する社会が、しばしば見出されることであつた。これは、近親婚が風習される一般的社会傾向との対比をみると、奇妙なことに思える。第一には、父方と母方とが非対称であることであつた。たとえば、母方の交又イトコと婚姻するものが、父方の交又イトコとの婚姻を好むという現象をみる。というような社会が、少ながらあつた。これを、母方の子孫増殖と見られるしかないのであるか? 第二には、とくにオーストラリア下地を多く対象としている、婚姻クワシシステムがある。これは、何か定型的なメカニズムをよよく調べてみると、ゆえに、代わりの親族の構造と同一の構造をなしているものである。たとえば、Karia 型とよばれる社会組織は、たぶんのイテラと似た教育的構造をなしている。西欧人

を採る親族一帯のメカニズム

近親婚

Murray's 等

大抵愛の群の構造について知ったのは、ほんの最近のことであつたから、これはなんとも奇妙で、ショッキングなことであつた、なぜなら、オーストラリア原住民の社会は、(たとへば Durkheim の理論においても) 太古の石器時代そのままの、この地上でもっとも「未開」な社会であることになつていたのである。(こうして西歐の自社会中心主義的な歴史-時間感覚が、ゆらぎはじめる。) 第4には、親族呼称法(Kinship Terminology)の問題があつた。人類学がとくに考察の対象とするような社会ほどの社会も、ゆらゆらの社会に較べてとびきり複雑な、こみいった親族呼称の体系をそなへてゐる。それらは一見まったく混乱した、各社会ごとに恣意的な体系であるかに思われるが、仔細にみえていくと、その実それなりに秩序だつており、いくつかの類型に類別可能であることがわかつてきた(→ Lowie [1928])。これら呼称システムの類型は、なにに対応するの? 総じて呼称システムとは、いかなる事態を反映してゐるのか? — として、第6に、親族組織をあげなければならぬ。リ=ジ(Linage)とか居住集団(local group)とかは、(おおむね)観察可能な人々のあつまりであつて、その目的もはっきりしてゐるから、基本的に言つてそこには謎めいたところなどなく、見えるかもしれない。それら集団は、要するに、人々が生存していくための協同集団ではなからか? — しかし、かならずしもはっきりしてゐないのは、それら集団相互の関係であり、としてまた、特定の集団形成原理(女系出自とか、母系出自とか)がある社会を採用的であることが、他の諸領域(たとへば宗教とか生産形態とか)とどのようなつながりをもつ(あるいはもたない)のか、であつた。いふなれば、当該の社会システム全体のなかで、親族組織の占める位置を、測つてみなければならぬのである。

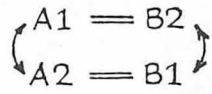
レヴィ=ストロースのまへには、これらほとんど手をつけかねるほどの、難問の山が、積たれ、ついでに、これらをいかに解釈すべきであるのか? レヴィ=ストロースは、これらを逐次他の問におきかへ結局は壁々めぐりになつてしまふ。それまでの常套的な接近にかえて、それらをいちどきに解きあかすという仕方をとつてゐる。ということは、答をとく鍵は、それら一連の問が提出される仕方のなかにかくしてゐた、ということだ。

3. 2 解けてしまふはなんということのない疑問でも、解かれるまでのあいだはとてつもない謎にみえる。ゆらゆらはいまさいゆいにもその解答——親族システムとは、女性を支配するためのシステムである——を思つてゐるのだが、それは、言つてみれば、レヴィ=ストロースに教へたのであつて、彼自身はもたらした人、自分の洞察を武器にこの謎にいどむしかなかつたのはたしかなことだ。

親族領域の一般理論を構築しようとするレヴィ=ストロースの企図は、場の理論のような種式をとることによつて、一挙に達せられた——いまになつて言ふのなら、たぶん、そのようにとらえるのが最も適切だろう。彼の理論のなかでは、ある社会の親族秩序の局所的な様相(個々人や集団に対してあらわれる仕方)と全域的な様相(全体として客観的にある仕方)とが、緊密に照応しあふことになる。個々はらばらのものとしてあるあいだはさも不可思議なものともみえた諸々の要素も、全域(システムの全体性)のなかでは、互いにしっかりと結びあひされ、もはや謎をのこす余地もなくなろう。禁忌の具体的ななはたらき方や、呼称法、親族組織の組みかたは、明らかに、そのような局所的な(ないし中域的な)性質のものである。そこで、問題は、そのような全任性へと到達する有効な手続きをみつかることであつた。(それゆゑ、構造主義の手法とは、まず第1に、発見的な手続きなのである。)

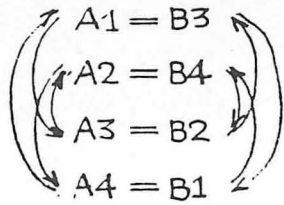
事態の全貌に一瞥に肉薄しようとするよりも、まず、レヴィ=ストロースに依つて、空間の全域に関する原住人の意義づけが明瞭なものととして与えられてゐるかに思われる語例 オーストラリアの諸々のシステム について、目も向けることから始めよう。

すでにすこしふいたように、オーストラリアの社会は、配偶者の後を継ぐ種族的に指定するやうな、きつめて奇妙な規則をもつてゐる。『今日のトニスム』にも紹介されてゐるにないかと思ふが、その最も典型的な例であるところの、Kariara 型および Aranda 型の社会組織について、みてみよう。その婚姻規則は、それとつぎのやうである:



Kariera型

a)



Aranda型

b)

図3.2.1 A/Bは母系半族也, 1/2/3/4は、如居住集団をあらわす。

各等式の両項は、どちらから読んでも、手前がH也、反対側がW也、矢印の先はZのSまたはDをあらわす。

このような婚姻規則の存在理由について、レヴィ=ストロースは、van Gennepの解釈を踏襲する旨のべている：

« ……外婚制は、結果として、ルーアン市の石工とマルセイユ市の建築師といったほかに、普通ではそれ以上接触することにならなかったようないくつかの特殊な社会集団を互いに結びつけることになり、また、おそらくそれを目的としている。……(中略)……部族が古くから存在してはいないだけ、そしてそれが多くの区分に分れてはいないだけ、世代から世代へとそれだけ複雑な婚姻交叉が成立するが、この交叉と交錯の規則は、その集団的優位は外婚制によって保証される。» (van Gennep [1920:351] → Lévi-Strauss [1962=1970:59f])

このような含意は、婚姻規則をや、仔細に分析すれば、ただちに確認することが出来るだろう。彼らの社会のメンバーは、婚姻クラスのちょうど半分の数にあたる如居住集団にわかれて、テリトリー内に分散しているが、それら集団は、上述の婚姻規則によって互いに厳重に縁いあゆませ、他の部分から切りはなされ内閉した部分社会をかたちづくることのないような、配慮のもとにおかれています。とみえてくるはずなのである。(オーストラリアの婚姻クラスシステムのこみいったメカニズムは、親族代数(Kinship Algebra)の名称のもとにいろいろに分析されたが、すでに1960年代までに研究されつくしてしまったかの観がある。)

オーストラリアの諸部族が採用している、婚姻クラスのような工夫が、利用可能であるための前提は、いうまでもなく、社会の全メンバーがそのような客

観的定クラスによって、監視がつけられていること、である。しかるに、このような監視は、オーストラリア北部などでごく一部の地域を除けば、見出すことができない。それゆえそれは、ごく特別な社会制度なのである。そこで、こうしたメカニズムをとらない、つまり、全域的に明示された客観的な監視を祖組みこんだ社会規範をもっていない、その他の地域の諸社会の親族秩序との関連を、考えてみるなければならない。

オーストラリアの婚姻クラスシステムは、Eしかに、ある種のイトコ婚を規定する点で、婚姻クラスをもたないままイトコ婚を選好する社会と、照応しており、互いに他のいわゆる「対位要素」を存すもののように、思われないこともないかもしれない。(たとえば、Kariera型では、MMBDD、MFZSDなどの交叉イトコが可婚であり、それに反して、すべての並行イトコは禁婚となる。) それゆえ、全域的にいかなる秩序を有するものが明らかではなれないし、よくとも局所的には、あまねく交叉イトコ婚が選好されるような社会があったとすれば、その社会の親族システムが全体としてオーストラリアシステムのそれのようにはたらいしているのではなからうか、と考へる余地が生じている。しかし、これが最も大切のポイントであるのだが、オーストラリアにみられるような、いわゆる双方組織の体系をとる婚姻規則のメカニズムは、交叉イトコ/並行イトコを区別することはできるかもしれないが、前者をさらに母方(交叉)イトコ/父方(交叉)イトコに区分して可婚/禁婚の指定を下すことができないのである。なぜなら、婚姻クラスXとYとが可婚であるということは、Xの男性とYの女性が可婚であると同様にYの男性とXの女性も可婚であるということであって、このような婚姻の反復から可婚者として指定されるものの総き柄は、基本的に言って、両方(すなわち、<sup>両方</sup>双方兼母方)交叉イトコとならざるをえないからである。(ふたつの集団間で双方向的な婚姻——双交接婚——がけゆさると、それにつがく世代で同じ集団間に婚姻が生じたなら、その婚姻型は、西方交叉イトコ婚(bilateral cross-cousin marriage)と存So.) とこそが、婚姻クラスをもたない社会で交叉イトコ婚が選好される場合、しばしば見出されるのは、母方交叉イトコ婚の選好なのであって、父方交叉イトコ婚はかえって避けられる場合が多いのである。このような、母方婚/父方婚の非対称性は、重要な経験的事実であるにもかかわらず、いま観察したオーストラリア



のシステムとは別系統である。といわねばならぬ。ということは、つまり、とりわけ母方を又イトゴとの婚姻が選好されるような社会があったとすれば、その社会の親族秩序が含む全域的な特性は、オーストラリアの、双分組織的婚姻クラスの場合とはまた別様のものとして、描かれねばならぬ、ということである。(こうして、レヴィ=ストロースは、van Gennepの洞窟の射程圏外で、親族秩序の一般理論をおもいよががなくてはならぬことになった。)

(ここに少々註言を付せば、オーストラリアの諸システムのなかには、母方を又イトゴ婚を選好するものがあるが、実在していることはしている。有名なMurnginシステムがその一つ。レヴィ=ストロースはその処理に随分と頭を悩ましたらしく、『親族の基本構造』でもきつめな大きなスペースをさいて論じ、それでも足りずに、数学者A. Weilの協力をあおいでいるほどである。結局、このシステムは、他の選好的事例と同様、(限定交授と一般交授と——後述——)の一連の中間的諸形態として、巧みに位置づけられているのであるが、民族誌的事実に照らし、彼の解釈が妥当か否かに関しては、きつめな議論の多いところだ。本節ではなから、以上を指摘するにとどめよう。)

3.3 すべての議論は、母方(又イトゴ選好)婚の存在理由に絞られてくる。なにゆえ、母方婚は父方婚と非対称であるのか? 母方婚が選好される一方に父方婚が禁止されたり、避けられたりするものがしばしばあるのは、どうしてか?

レヴィ=ストロースの考えは、簡明・直截なものであつた。もちろんそのように発想しうるためには、彼は、自らを、近親者禁忌の概念的發明から完全に引きはなすべく必要があつたが、『親族の基本構造』の前段でその作業を急ぐりにすませたあと、レヴィ=ストロースは問題の核心に踏みこむ。

母方婚、父方婚は、ともに血縁婚である。血縁婚とは何であるか? 人が相互に血縁者であるとは、互いの婚姻を介して相互に血縁をたどりうる(一般に、互いのある夫婦を共通祖とする、直系血縁同士である)ことを、いみしている。つまり、血縁婚とは、当該の婚姻がすでに実現されたある婚姻と一定の

関係のもとにあるとみられるとき、当該の婚姻に与えられる規定性である。それゆえ、ある型の血縁婚だけを繰返し実行していくなら、これらの婚姻はつぎつぎに互いに同様の関係のもとにおかれていくことになるから、全体として親族空間にある種の秩序を創みこむことになるだろうと考えられる。

母方(第1又イトゴ)婚と、父方(第1又イトゴ)婚とを、より綿密に参照させてみよう:

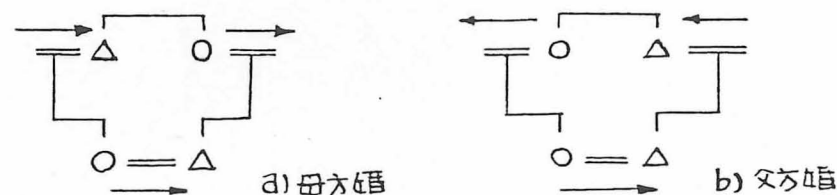


図3.3.1

いま、ひとつの婚姻を、女性の贈与、と考えるとしよう。贈与の方向は、図中、矢印→によって、示されている。すると、レヴィ=ストロースの指摘する通りに、母方婚が、前の世代に行なわれた女性の移転を再びくりかえすものであるのに対し、父方婚は、前の世代の移転を逆転させ、帳消しにし、無化してしまうものである。(これは、婚姻の当事者(集団)によつて、明瞭に意図されていようとするいはいまいと、さうである。)

母方婚を選好したり、父方婚を禁止したり、……という行動準則なり社会規範なりが、ある社会で一般に成立している場合がある。ここで「一般に」というのは、当該社会の人々が婚姻に関わるときなべてそのような準則や規範にからまれてしまう、という社会的事実が、各人に一律に成立しているということをも、いっている。母方婚への傾斜が、ある社会の親族空間の局所的な様相であるとすれば、その全域的な理由とは、いかなるものであるだろうか?

母方婚の全域的な含意を推しはかるため、当該社会のすべての婚姻が母方(第1又イトゴ)婚だった、と想定してみよう。すると、わけわけは、つぎのような婚姻の網の目をうるはずである(図3.3.2):

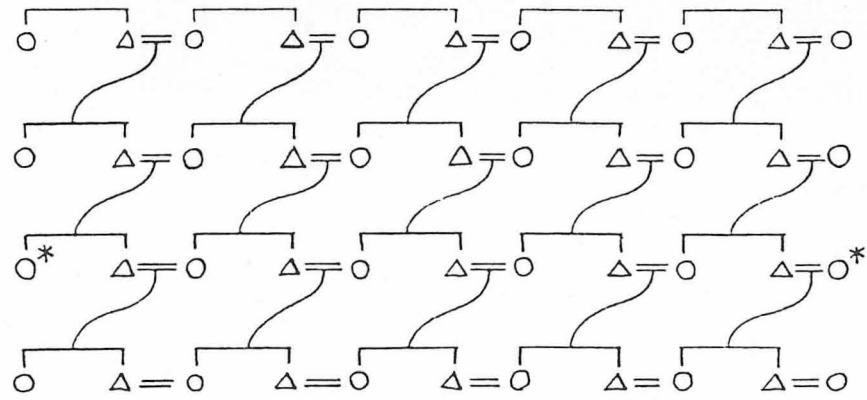


図3.3.2

当該社会のオバケのメンバーが、この図表のごとくに位置づくと考えよう。すると、(ある世代の女性は有様あるのだから) 図表をごとく進むも右側へたどっていくと、ついには左側に位置していたと同一の女性(\*印)が、あらわれてくるはずである。つまり、母方婚の普及が全域的に実現してしまうにちがいないのは、このように社会の全域をつらぬく、一方向的な女性の移転のつらなりからなる円環であるのだ。

これに於いて、女方婚は、社会の全域にかかりうるような婚姻交換の連鎖を決してうみださないことが、同様の論法によってたしかめられる(図3.3.3)。レヴィ=ストロースの言い方によれば、それは、一方の支払遅延をとまなうような物々交換、あるいはせいぜい短期貸付にしか、すぎない。親族空間はそのいたるところ、贈与の回収をためる部分的な利害によって、可断されてしまう。女方婚を推奨づけるような社会が見出されないのは、女方婚が、全域的にはいかなるいみももたないからである、といえるだろう。

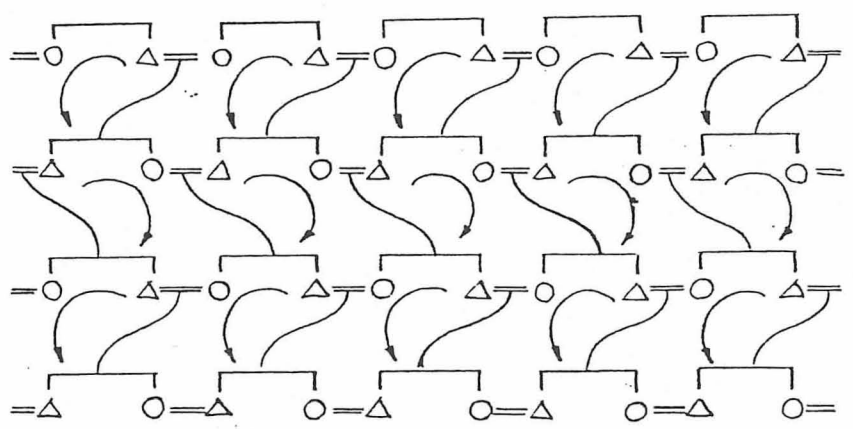


図3.3.3

3.4 このような母方婚の含意を、多分つぎのように考えるのがもっとも判明だろう。とゆたしは思う——母方婚は、親族空間を屈曲させ、そこにある曲率を与えるのである。もし母方婚がそのいたるところで選好されるなら、空間はあらゆる場所で一律に曲がりこむ結果、閉じたものとなり、その上を婚姻によって移転してゆく女性の経路も、有限な円環をなすことになる。局所的に見るならば、母方婚がそのように空間を曲げているとは、思われなない。しかし全域的にみれば、まぎれもなくそののである。(レヴィ=ストロースは、これを、広場をはしるオートバイの脚で説明している。もしハンドルをわずかでモーネに切ったまま進めば、いつのまにか必ず旧のところにもどってきてしまう、というのだ。)

ゆいゆいの社会では、婚姻における配偶者の選択は、縁手柄とはかかゆりなく、いわば確率的にままっ2いく。だから、その親族空間の底かたにたつてみれば、どちらも等方的に見えるだろう。ゆいゆいの社会の親族空間は、一律かつ等方である。それに対し、母方婚を選好するような社会の親族空間は、一律ではあっても決して等方的ではない。母方にあると父方にあるとは、女性のいみがまるまり異なる。それは、空間が、女性に関して有方向的であるからである。母方婚は、女性を上方へと動かしてゆく。そのことにより、テンションを産みつけてるので、空間を彎曲させてしまう。(あるいは、とにかく空間が彎曲してしまっただから、そのなかでは一律に母方婚が選好される、と考えるもおなじことである。) それに対し、女方婚は、そのようなテンションをうみだすはしから解消するようにはたらくのだから、空間を彎曲させることはできない。

両方婚はどうか? 両方婚とは、母方婚でありかつ父方婚でもあるようなものことだから、上の編結を足しあわせるならば、いくぶんかは空間を曲げるということがあってもよいように見える。レヴィ=ストロースは、両方婚選好の底にも母方婚への傾斜をみとめて、事実上それらを一括して扱おうとしているようである。では、オーストラリアシステムのような場合は、どうであるか? 真正の両方婚は、実質的には2女交換と等しいから、そこにはさかのぼ

テンシヤルを産み出すこともないだろう。つまり、空間はち、とも曲がらない。だから、全域的な交換の経路を描きだすためには、空間をいくつかの範囲に分けた上で、ことさらにそれを折りまげなければならなかったのである。空間を

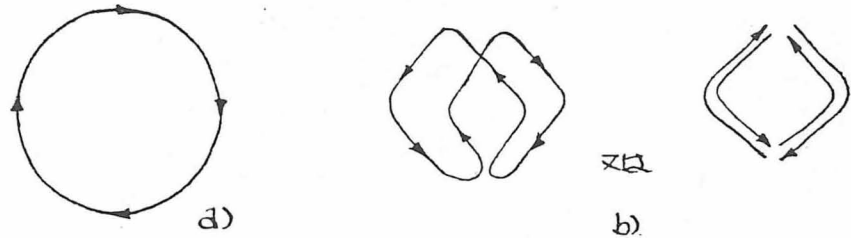


図3.4.1

曲がるかわりに、交換経路をディジタルに折りまげたのだ。このいみで、オーストラリアの親族空間は、はなはだ「人為的」な工夫の産物であると言えよう(図3.4.1)。レヴィ=ストロースが、母方婚の拓く交換サイクルのことと、一般交換(échange généralisé)とよぶのに対し、オーストラリアの場合のような、両方婚の拓く交換サイクルのあり方を限定交換(échange restreint)とよぶのも、そうした理由によるのである。(Maussを通じて Durkheimの弟子でもあるレヴィ=ストロースは、一般交換を「いっとう大きな自発的運帯」と結びつける記述を示している。たとえば、Lévi-Strauss [1949: 518 & 2]をみよ——ただしこの部分は、原稿版では書き替えてしまっている。) 基本的なのは、一般交換システムであり、限定交換システムはせいぜいその代替メカニズム、ということなのだ。

### 3.5 レヴィ=ストロースのいう、親族の「基本構造」をもつ社会とは

母方婚によつてか、はたまた両方婚によつてか、女性の循環的な交換経路を明示的にもつような社会である。後者、すなわち限定交換システムの場合には、全域を支配する親族最隣とそれを介して交換経路を折り曲げるための婚姻規則によつて、経路の循環は客観的にあらわれてしまっており、原産の人々によつても理論家によつてもそれと掴まれている。それに対して、前者、すなわち一般交換システムの交換経路は、さしあたり理論的にその存在が予測されたばかりであつて、原産の人々によつてもそれと掴まれているに限らない。理論家に

とつてもまた、観察可能なかたちで民族誌のなかに与えられているわけではない。したがつて、レヴィ=ストロースは一般交換のサイクルが客観的に存在する、という実証化の手続きを、彼自身の工夫によつて考察しなければならなかった。その工夫が、いわゆる「縮約モデル(modèle réduit)」である。

縮約モデルの定義としてレヴィ=ストロースがのべているところを、資料として掲げておいた。要するにそれは、図3.3.2に示したような親族関係の網の目を下敷きにして、当該社会の親族語彙をなるべく簡潔に整理してみせ、その手続きがうまくいくことをもつて一般交換サイクルの存在の論証としよう、とするものである。この縮約モデル法については、厳密に考へていけば、いろいろ問題があることがわかってくるのだが、いまはそれをあきらめ、その工夫のいみするところを考へてみよう。

まずま、さきにわれわれが考へなければならぬのは、親族呼称法(Kinship Terminology)とはなにか、ということである。いま、こみいった中間の議論を素飛ばして、話を簡単にし、その結論だけをのべておけば——呼称法は、親族空間における、当人を中心とした認知図式(ego-centered cognitive map)に相当するものである。当該社会のメンバーは、誰しも、生身の身元をもつて他の人々に互し、そこで<性>関係をいとなみながら生存していくしかない。そこで、その社会がどのように客観的な親族秩序をなぞっているにせよ、誰ひとりそれを直接全域においてつかむことはできず、局所的に体験することができただけである。親族空間はどこも一様にかたちづくられているので、各自の局所的な共通の体験を、局所的な範囲へと移しかえることが、可能であるのだ。それゆゑ、呼称法は、当該社会の親族空間の局所的な様相と、密接に照応しているといえるのである。

さて、当該社会が一般交換を行なつており、親族空間の全域がある曲率をもつて構んでいる、と想定しよう。しかし、この社会にいる各人々は、この空間がある曲率をもつて構んでいるとは、まったく気がつかないかもしれない。それゆゑ、ある曲率をもつた親族空間の全域に対して、その空間のなかで各人の体験する局所的な親族空間は、ちょうど接空間(Tangent Space)のような関係にある、と考えられる。レヴィ=ストロースの実証化手続き、縮約モデルは、このような接空間をよせあつめていって、空間の全域を(再)構成しようとする

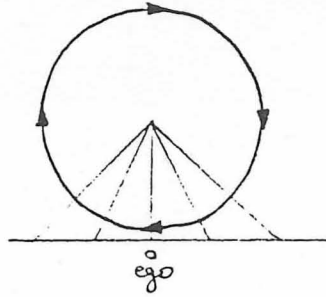


図3.5.1

手続きなのである。(レヴィ=ストロース自身は、これを、メルカトル図法に譬えている。いま、地球に相当する曲面として一般交換サイクルがあったとすると、呼称法の体系は、そのまわりたてられた方眼紙である。それは、軌道に与ってたてられる限りで、精確に空間の曲率を反映するはずであるのに、認知図式の上へひきのばすことで、曲率を喪失して、固有の歪みを生ずることになる。したがって、この地図を「読む」ためには、それらがひとつの全体映すものであることを知り、そこに見出される歪みからもとの曲率を逆算していくことが必須である、というわけだ。

民族誌がいろいろな表でつくられる。度地人の呼称法、儀礼、そのほか日常的な慣習などは、いかにも、親族空間の局所的な様相であり、全域に対して接空間(ある切り口)を与えるだけのものである。そこから、根拠ある論証手続きによって、親族空間の全域に関する命題を算出しなければならない。レヴィ=ストロースの方法は、このような手続きを与えるものである。

縮約モデルは、展開モデル(modèle développé)を縮約するようにして、つくる。展開モデルは、ある個体が親族空間のなかで深いつとみできる多様な関係の束を、その当人を中心として周囲に残らず配したモデルであるようだが、呼称法における継ぎ柄の同一視を手掛かりにして、この展開モデルの各点を重ね合わせていく。すでにのべたように、呼称法にもいろいろの類型があるのだが、いわゆるスーダンタイプ(Sudanese Type)のような、叙述的(descriptive)な場合であると、同一視による縮約の余地はほとんどない。それに対して、オマハタイプ(Omaha Type)系統の呼称法の場合には、一連の重なり同一視の余地がある。たとえば、M=MB, F=FB, W=MBD, WH=MB, H=FZD, HM=FD, ...。これらの同一視は、やみくもなものはなく秩序だったものであり、父方親/母方親の対比(非同一視)は散在に採られている。そこで、展開モデル

を縮約していくと、そこに(擬似的な)空間の曲率を画きだすことができることになる。

### 3.6 縮約モデルという実証化手続きによって、親族空間の局所と全域

の様相は互いに緊密に関連づけられ、社会理論としての構造人類学が、その空をあらゆるしてくる。レヴィ=ストロースが『親族の基本構造』、ことにその後半でくりひろげている仕事は、この縮約モデルに根拠したものである。彼は、血縁による選好婚のメカニズムをもつような社会をぎっぎと縫ひ縫ひしてゆき、それらが、そのあらゆるみかけ上の差異にもかかわらず、みな同一のもの——一般交換の交換サイクル——を含むことを、主張するのである。(逆に言えば、こうなるだろう——親族システムの客観的互存立根拠が、女性の交換を秩序づけることに求められるとするならば、各社会の民族誌をいろいろと見れば、種々の性質は、親族システムの本質的な規定因ではなく、単なる偶発的な要因であるとみなすべきであること。)

そこで、いまのわけは、3.1節で提示しておいた一連の疑問に、レヴィ=ストロースの構造人類学がどのように答えてくれているのか、整理してのべておくほうがよいであろう。近親婚の禁止は、親族空間を自然状態から出離させ、それとしてなりたせる根拠を与える。親族呼称法は、親族空間の局所的な様相を総括化するものだ。それに対して、その全域的な性質は、(基本構造をもつと言われる社会では)女性の交換経路の描かれかたにあらわれてくる。そのひとつの場合には、全域的な大範疇によって交換経路を社会規範に組みこむ仕方があって、具体的には双令組織や婚姻クラスとしてあらわれる。それに対して、交換経路が空間の彎曲によって与えられる場合には、種々の選好婚、ことに母方/父方の非対称性があらわれてくる。(もちろんそれは、再び親族呼称法へと投影されているわけである。)そして、さまざまな親族組織や出自集団は、生活のための機能的な必要から直接生まれたようにみえるけれども、(そして機能的な必要によってたしかに条件を課せられるけれども)、その出現の仕方は多少に偶発的であり、交換経路に較べてみるなら一義的な規定因ではない、とみるべきであることになる。——以上が、レヴィ=ストロースの解決であった

と言っている。ここでまとめたのは、もちろん典型的な場合であり、2のほかに種々さまざまな中間形態や過渡的諸形態が存在する。実際、レヴィ=ストロースが最も得意とし、『親族の基本構造』のなかでも大きく扱われ、わいわいにとってモットも説得力に富むのが、こうした過渡的諸形態を処理する部分なのであるけれども、その紹介をのこらずに受しなければならぬのは残念である。ただし、これらの形態といふことも、いまのべた基本的な図式によって読みとかれるのは、たしかであるが。

### 3.7 構造人類学に対する視角のうち、社会理論としてそれを見ようとする視角にたつたら、言うべきことはほぼここまでのべたことに尽きている。これに対して、のこるいまひとつの視角から、事態を整理してみよう——構造主義の方法としての面目は、どこにあらわれているのか？

レヴィ=ストロースの構造人類学は、たしかに、すでにのべた構造的な手法からいたるところなりたっている。しかし、これは整理も定式化もいまだいていないものであるため、これについて明確にのべるのがむずかしくなっている。(あるいは、レヴィ=ストロース本人の側に、構造的な方法に関する自覚がどのこまで十分でなく、方法上の混乱と逡巡があった、ということなのかもしれない。) わいわいは、さきの Klein の定式化 (p.9) にいう空間  $R$  の解釈に依りて、いくつかのケースを区別して示しておきたい。

第1は、一般交換システムを空間  $R$  にとる場合。この場合、不変な構造は、

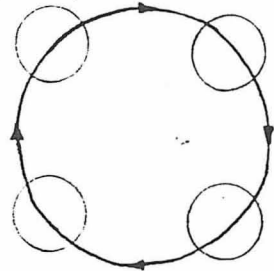


図3.7.1

一般交換のサイクルとい自身であり、その上に析出する、女系集団または母系集団のたぐいが、あるいは、優位側/劣位側の分化の仕方であるとか、母方オオとの関係のさまざまなヴァリエーションであるとかかが、可変的なもの、非本質的なものであることになる。これらの、たがちに観察可能なものであり、民族誌の

主要部分を占めるけれども、その実、親族空間のより表層に属するものであって、

その実在性においてはむしろ一歩をゆずるものである、と考えられよう。

第2は、基本構造をもつ社会——わたしの言い方では、基本社会——の親族空間を、 $R$  とみたえる考え方。このように考える場合には、一般交換と仮定して限定交換の諸システムもまた、考慮に含めなければならぬ。この第2の考え方のほうが、第1のものより、『親族の基本構造』という書物全体の企図をよくあらわしている、と言うべきだろうが、難点は、空間  $R$  を拡張した分だけ、不変な構造の、そしてまたその上にかかる変換  $G$  の解釈が、むずかしくなることである。ともあれ解釈を試みれば——構造は、一般交換経路(あるいは空間の彎曲)よりもさらに一般化すれば、ともかくも当該社会においてまんべんなく規則的に女性を環流させる交流のネットワークがあること、となる。Eぶんこいがある名は、(女性に関する)互酬性の原理に相当する、と考えてもよいかもしれない。一方、変換  $G$  のほうは、定式化が困難である。第1の場合であれば、ある特定の社会の一般交換のシステムを、別の社会のそれに変換するようなアルゴリズムが、いちおうは想定可能であった——たとえば、母系/父系、……とのほかの各要素を、互換的に置きかえるような操作を考えてみればよい——のに対し、もはやそのような単純な仕方では民族誌をカバーできないのは、明らかである。(ひとつの考え方の可能性としては、図3.4.1で示したような、交換経路の変形を、あらたに変換群のなかに追加する、という仕方があるかもしれない、と言える。)

さらに第3には、オオの人間社会を  $R$  にとることも、できなくはない。『親族の基本構造』では展開されこしなかったが、どこに書かれている予告の文章や、当時のこのほかの作業からするに、レヴィ=ストロースが一時このような企図を抱いていたことは、明らかである。非基本社会にも、互酬性の原理をおし広げ、女性ばかりではなくことはや物財の交流のシステムとしてそれらをとらえようとする構想——彼自身言うところの、コミュニケーションの一般理論が、これであろう——には、しかし、解きがたい問題点がある。だいいちに、不変な構造として何をとらねばべきであるのかが、すでに見透しにくくなっている。(これについては、橋爪 [1975] でものべたけれども、) レヴィ=ストロース自身、この構想の具体化に挫折し、これを放棄しているわけであって、どうやら、この構想がすでに、構造的な手法が有効である圏域をはなれてしま

っている節がある。あたらしい方法を手にするのさな限り、この積習の上にならした仕事をすることは、多分むずかしいだろう。

構造人類学は、いくつかの幸運とレヴィ=ストロースの才能とに恵まれて、社会理論として成功した。それが、成功のための条件を、十分かゆを忘えていたのは、亦正にここまで見えてきた通りである。(それゆえ、それは、成功の条件がかならずしも十分に整っていないとこそでは、決してうまく実を結ばなかった。)

レヴィ=ストロースは、このあと、神話分析へと転進し、その分野で構造人類学を大成させていくことになる——それは、構造主義としてはたしかに大いなる発展の途であり、しかもたしかに本質的な発展であったけれども、社会理論としてみれば、そこからの明瞭な撤退をいみするものであった。

4 構造人類学の成功をみちびいた僥倖は、構造主義の方法が、記述すべき当の社会のあり方と、大層適合していた——言うなれば、構造主義のモデルの本質的な普遍性が高かった——ということである。構造主義の方法は、いついかなる場合に誰が用いてもよい方法であるけれども、その方法を採用することの理論上のメリットは、当然のことながら、対象の性質や理論のゆらい目に依存するものである。いつも大きいとは限らない。そこで、最後にこの節では、構造主義の方法の特性と、社会理論としての限界を、ごくごく簡単にのべてみよう。

#### 4.1 構造主義とは、本質的に言って、比較法である。

構造主義は、秘教めいた呪術的操作ではない、このべた。それは、与えられた対象のすべてにかかわる変換を、そしてその変換に不変なものとしての構造を、特定することのできる、形式的な操作からなる。(すくなくとも、最終的

にはそのような操作として形式化されることか、めざしている、と11ってよい。) しかし、構造主義の特徴をなしていると思われるのは、このような構造がはじめからモデル化されるということがなく、対象や資料に内在し、それを分析的に整理していく試行のなかから、発見的につかみだされる、ということであろう。そのいみで、構造主義は、発見的な技法としてある、とみてよいかえな。 (それゆえ、その作業のすすめかたは、対象領域の独立性と研究者の修練とに依存する度合いがよくなり、結果的に、秘儀的な性格をもちこまうことかともすればありうる。)

発見的な技法としての構造主義は、一連の事象を支配する、構造と変換とを発見しようとする手続きである。それは、個々の事象をよいとして実在するものとみるよりは、本質的には同一性を有する一連の事象の、ひとつのあらゆる側面としてみる。比較というのは、両方向的な操作であるから、たとえば歴史的な事態を扱うのに、構造主義はもともと不向きである。なぜなら歴史とは、一方向的な過程にもとづく、真に累積的ななにかであるからだ。レヴィ=ストロースは、(一度の失敗にこりてか)このような方法上の制約に自覚的であって、つまらない入マをしでかさないように慎重であるようにみえるけれども、もう少々センスの悪い手合は、方法にあわせて歴史的対象を切りまがみ、歴史など成立不可能であるかのような顔をしてまわしている。(どのような対象でも、歴史的な事象の系列であっても、構造的な手法でとり扱えないことはないけれども、それは、歴史が構造的な事態であるということとは、まったく異なることである。) 歴史を考えるためには、また別の方法を考えるほうがよい。

構造主義とは、第一義的には、技法であると思うので、明示的なモデルをよなえた社会理論の体裁をとることは、むずかしいであろう。また、それが必要なことであるとも思われない。見出された構造が、社会理論として、奥深い含蓄を与えるということとは、あるだろう。(それゆえ、生成文法が、比較法的な手順と結びついて、普遍文法の概念に達するとき、人間科学的に深い含蓄をうむのと、相当である。) しかしそれは、事後的に見出される帰結の普遍性がある、と言うべきだ。わたしは、構造主義が、ゆれゆれの必要とする社会モデルを提出する立場にはないと思うので、それを、別の工夫によって手に入

れるようにしなければならぬ。と考えている。構造主義に過大な期待をかけた。神秘化したりする必要はないのであ。2. ただその区十分に理解され、あらゆる創造的・発見的な試みのなかで、適切に活用されたい。

4.2 要約しよう — いくつかの社会が並列的に与えられてあるところから出発するとしても、構造主義は、それら社会(の諸事象)のあいだに成立した相互交換のアルゴリズムを対象とする。これに対して、ゆいゆいの考える社会理論は、ある特定の社会のなかではたらく。フォーマルロジックを掲げようとするものだ。構造人類学(構造主義的社会理論)の成功は、ちやうどこの社会の基幹となる要素が相互交換のアルゴリズムによって保たれるような一連の社会——未開社会——が民族誌的なデータとして与えられてあったところにもたらされたものである。このような幸運は必ずしもゆいゆいのものではないから、本来このゆいゆいを要するこのふたつの接近法が、互いに他にどのようなものをもたらさなければ、いさゝか工夫の限りをくわして見たあとでなければならぬ。多くの研究者の努力がまたゆいゆいの人である。(以上本文75枚)

【起記】十分な準備もないままかなり周章して書き足していった文章なので、読みかえしてみても、不注意からする誤りや不適切な記述、意に添えない部分が無数に目につく。けれども、ゆいゆいのスケッチはゆいゆいを修正する文のいとまを与えていない。寛容を乞う次第である。

Barbut, Marc 1966 'Le sens du mot « Structure » en mathématique', Les temps modernes 246: =1968

伊東俊太郎訳, 「数学における「構造」という言葉の意味について」, 『構造主義とは何か』, みすず書房。

Bourbaki, Nicolas 1966 Éléments de mathématique: Théorie des ensembles, Hermann, =1968 前原昭二訳, 『数学原論 集合論 1,2,3』, 東京図書。

橋爪大三郎 1973 『初期レヴィ = ストロース研究 — 『親族の基本構造』を中心にして —』, (未発表)。

1975 『親族・家族・社会システム — 人類学的交換理論の論理とその拡張 —』, 『家族研究年報』 1:12-24。

1976 『交換と社会システム』, (未発表)。

1977 『構造 = 機能理論の射程と限界』, (未発表)。

1979 『記号空間 = 社会』, (未発表)。

Klein, Felix 1872 'Vergleichende Betrachtungen über neuere geometrische Forschungen', =1970 寺阪英孝・大西正男訳, 『エルランゲン・プログラム(現代数学の系譜 7)』, 共立出版。

Lane, Michael (ed.) 1970 Structuralism: A Reader, Jonathan Cape, =1978 藤田一士監訳, 『構造主義』, 研索社出版。

Lapointe, François H. & Claire C. 1977 Claude Lévi-Strauss and His Critics: An International Bibliography of Criticism(1950-1976), Followed by a Bibliography of the Writings of Claude Lévi-Strauss, Garland Publishing, Inc.

Lévi-Strauss, Claude 1947 Les structures élémentaires de la parenté; 1949 P.U.F.

1962 Le totemisme aujourd'hui, P.U.F. =1970 仲沢敏雄訳, 『今日のトテニスム』, みすず書房。

1967 Les structures élémentaires de la parenté (deuxième éd.), Mouton =1977/1978 馬淵東一・田島節也監訳, 『親族の基本構造(上)(下)』, 音所書房。

Lowie, R.H. 1928 'A Note on Relationship Terminologies', American Anthropologist 30:263-267.

『数理科学』 1979 『研究・数学的構造』(vol.17-No.6), サイエンス社。  
盛山和夫 1978 『規範形成過程に関するノート — Homans v.s. Lévi-Strauss 論争に即して —』, 『シシオロギス』 2:11-29。

van Gennep, A. L'Etat actuel du probleme totemique, (1920)

CN 83

Hashizume, Daisaburo

¥100.-

1979-7-7 completed

[資料]

レヴィ=ストロース (Claude Lévi-Strauss) 略年譜\*

- 1908.11.28 Brussel に生る。両親はユダヤ系フランス人。父は印象派の画家。
- 1914-1918 戦争を遁れ Paris から Versailles に一家は移り住む。浮世絵、(6-10才) 異国趣味、動植物学、地質学への嗜好。
- 1921 (13才) Paris の高等学校に入学。
- 1925 (17才) ヘルマンの青年から社会主義の手ほどきを受け、Marx に熱中。
- 1927 (19才) ~ 高等学校を卒業、1930年にかけて Paris 大学法学部・文学部に籍をおく。精神分析学、臨床心理学ほかを学ぶ。Rousseau, Comte, Saint-Simon, Durkheim などを読む。P. Nizan を介し、人類学への関心を抱く。
- 1931 (23才) ~ 哲学教授資格試験に合格。M. Merleau-Ponty, S. de Beauvoir と3人一組で、教育実習を行った。
- 1932 (24才) ~ 高等学校で 哲学 を教授する。
- 1934 (26才) ~ São Paulo 大学 社会学教授として赴任する。R. H. Lowie の Primitive Society を読み感銘をうく。大学では Boas, Kroeber, Lowie ら、アメリカ人類学を中心に論考。夏休みに Caduwo 族、Pororo 族 探査。
- 1938-1939 大学を辞し、中央部アマゾン川の探査行をおこなう。Nambikwara (29-30才) 族、Tupi-Kawahib 族を調査。
- 1939 (31才) 動員令を受け、帰国。東部軍輸隊につく。翌年対独講和成立し、兵役解除。
- 1941 (33才) ~ Marseille から貨客船でアメリカ大陸へ脱出。A. Breton と同船。Lowie の尽力で、New York の New School for Social Research に職をうける。亡命中の R. Jakobson を知る。
- 1944 (36才) Les structures élémentaires de la parenté の準備に着手。

- 1945 (37才) Jakobson らの創刊になる雑誌 Word に、論文、'L'analyse structurale en linguistique et en anthropologie' を発表。
- 1946 (38才) 註米文化顧問として、A. Camus の訪米を世話する。
- 1947-2月 Les structures élémentaires de la parenté を完成。
- 1948 (40才) Paris に戻り、人類学博物館副館長に就任。La vie familiale et sociale des indiens Nambikwara 出版。
- 1949 (41才) Les structures élémentaires de la parenté 出版。
- 1950 (42才) Paris 大学高等研究院、宗教科学部門の指導教官となる。
- 1954 (46才) 三度目の妻 Monique と結婚。
- 1955 (47才) 論文 'The Structural Study of Myth' を発表。Tristes Tropiques 出版。好評を博すが、この記事から Sartre と仲違いする。
- 1958 (50才) Anthropologie structurale 出版。Collège de France 社会人類学講座 正教授に就任が決定する。
- 1961 (53才) L'homme 創刊
- 1962 (54才) Le totémisme aujourd'hui, La pensée sauvage 出版。
- 1964 (56才) Mythologiques \* : Le cru et le cuit 出版。
- 1965 (57才) Mythologiques \*\* : Du miel aux cendres 出版。
- 1967 (59才) Les structures élémentaires de la parenté, 改訂版出版。
- 1968 (60才) Mythologique \*\*\* : L'origine des manières de table 出版。
- 1971 (63才) Mythologique \*\*\*\* : L'homme nu 出版。
- 1973 (65才) Anthropologie structurale, tome II 出版。
- 1975 (67才) La vie des masques (2 vols.) 出版。
- 1977 (69才) 来日

\* Tristes Tropiques (1955) をもとに、種々のデータを加味して作成した。年代に 諸説あるものが多いが、適当に取捨し、いちいち記さなかった。伝記研究がすすめば、修正される余地も多いはずである。



2-1 BASIC CONCEPTS IN KINSHIP STUDIES

a. Reference

Abbreviations: F:father M:mather S:son  
D:daughter B:brother Z:sister H:husband W:wife  
MBD:mother's brother's daughter &c.

matrilateral/patrilateral/bilateral colateral  
1st / 2nd / 3rd unilateral  
-in-law

cross / parallel

b. Descent (filiation)

line lineality  
unilineal / non-unilineal  
bilineal / ambilineal

patrilineal / matrilineal  
patriarchal / matriarchal  
ancestor / descendant

c. Marriage

kin / affine  
consanguineous marriage

incest i) incest / marriage / adultery prohibition  
ii) incest / (normal intercourse) taboo

endogamy / exogamy  
endogamie vrai  
endogamie fonctionelle

monogamy / polygamy polyandry / polygyny

anisogamie hypergamy / hypogamy

levirate / sororate / avancurate

matrimonial exchange

matrilateral exchange = matrilateral cross-cousin marriage  
patrilateral exchange = patrilateral cross-cousin marriage  
bilateral exchange = bilateral cross-cousin marriage

brideprice / dowry  
bridewealth

restricted exchange / generalized exchange  
preference / prescription

d. Group

tribe - clan - sub-clan - lineage - branch  
lineage: unilineal descend group.

stock cognatic stock cognate  
kindred

locality / residence

patrilocal / matrilocal / avunculocal / ambilocal  
virilocal / uxorilocal

phratry

dual organization

moiety moitie  
section section  
sub-section sous-section  
marriage class

e. Terminology

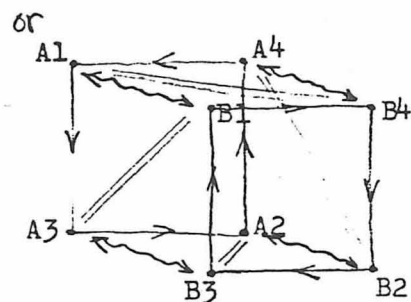
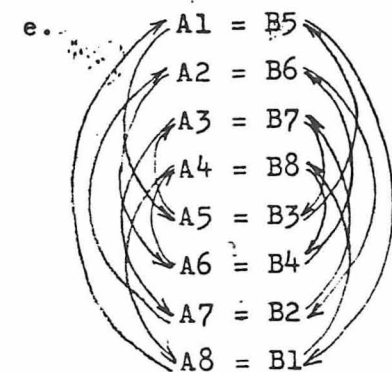
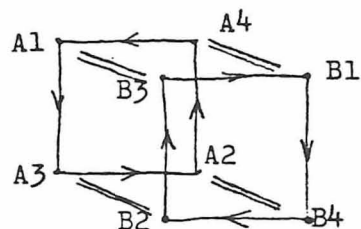
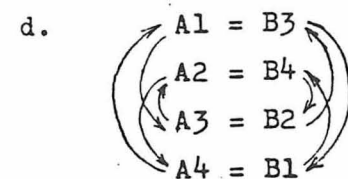
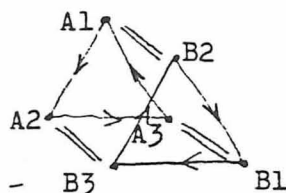
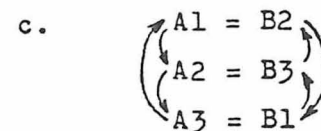
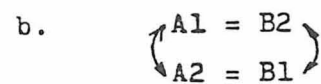
term of reference / term of address  
ego male-speaking / female-speaking  
kin universe

f.

harmonic / disharmonic.

[資料]

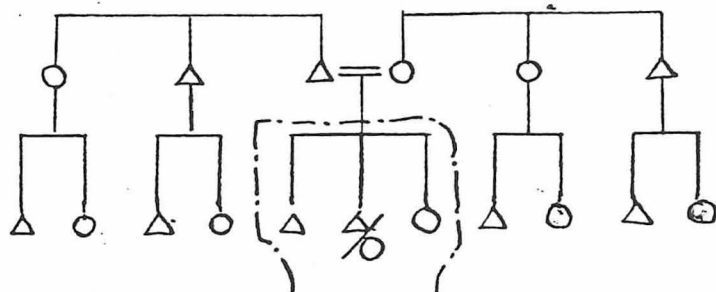
2-5 Models of Restricted Exchange



A / B : matrilineal moiety  
1 / 2 / 3 / 4 ... : patrilocal group

2-6 Kinship Terminology

i) Eskimo Type  $\text{FZD} = \text{FBD} = \text{MZD} = \text{MBD} \neq \text{Z}$

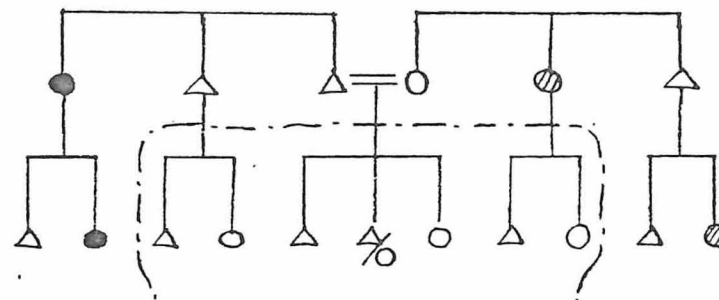


ii) Hawaiian Type  $\text{FZD} = \text{FBD} = \text{Z} = \text{MZD} = \text{MBD}$  "Generation Type"

iii) Iroquois Type  $\text{FZD} = \text{MBD} \neq \text{FBD} = \text{Z} = \text{MZD}$

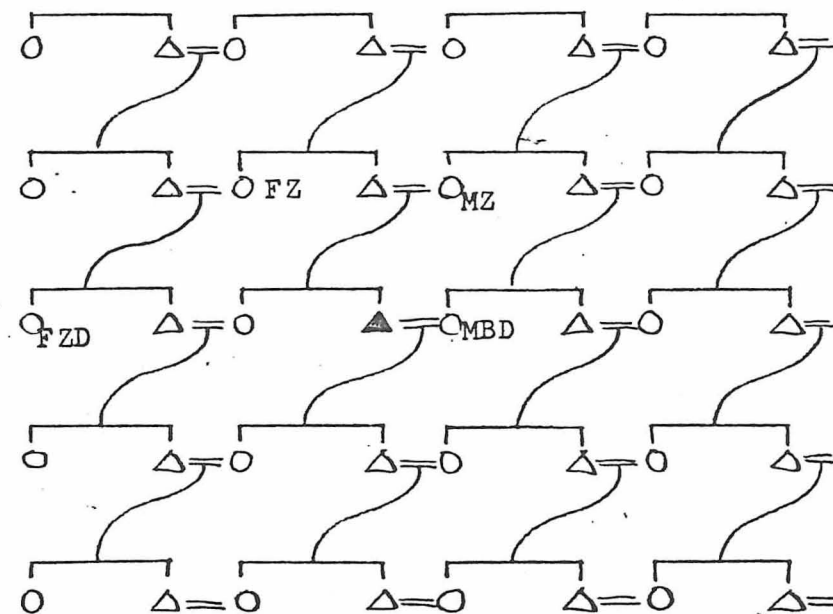
iv) Sudanese Type  $\text{FZD}, \text{MBD}, \text{Z}$ , parallel cousins, aunts and nieces are all distinct each other. "Discriptive Type"

v) Omaha Type  $\text{FZD} \neq \text{MBD} \neq \text{FBD} = \text{Z} = \text{MZD} \neq \text{FZD}$   
 $\text{FZD} = \text{FZ}$  and/or  $\text{MBD} = \text{MZ}$



vi) Crow Type  $\text{FZD} \neq \text{MBD} \neq \text{FBD} = \text{Z} = \text{MZD} \neq \text{FZD}$   
 $\text{FZD} = \text{FZ}$  and/or  $\text{MBD} = \text{BD}$

2-7 Reduced Model



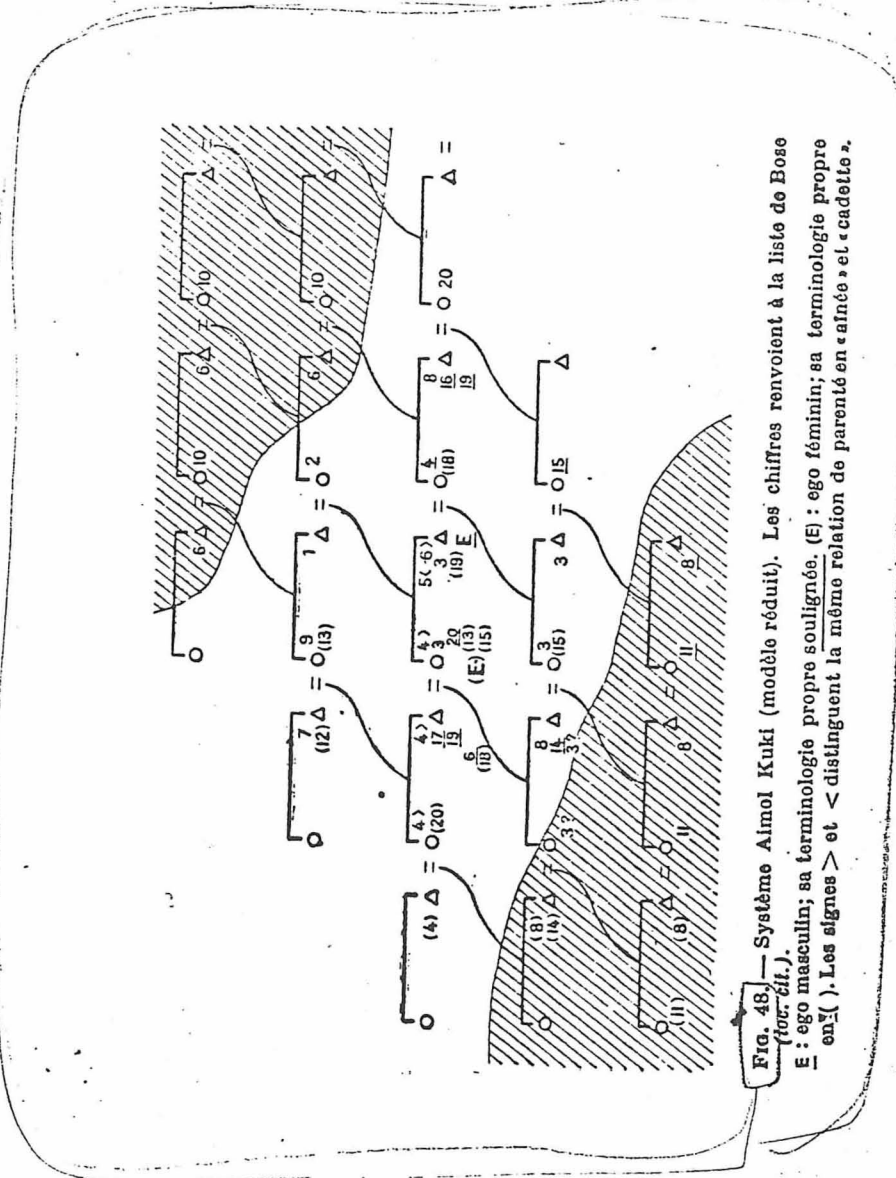


FIG. 48. — Système Aimol Kuki (modèle réduit). Les chiffres renvoient à la liste de Bose (loc. cit.).  
 E : ego masculin; sa terminologie propre soulignée. (E) : ego féminin; sa terminologie propre en italique. Les signes > et < distinguent la même relation de parenté en « aîné » et « cadette ».

和版 2145- 附 院

faire appel à — への呼びかけ  
 — への呼びかけ

⑤ Les Aimol-Kuki de la frontière birmane ont des moitiés qui furent jadis exogamiques, et des clans qui le sont strictement restés. Les deux moitiés (et par conséquent les clans qui les constituent) sont séparées par des différences considérables de statut. La moitié « supérieure » a une prééminence politique et religieuse; et seuls ses membres peuvent célébrer les fêtes de type « potlatch » qui permettent d'acquérir du prestige (1). La filiation est patrilinéaire, et bien que le mariage correct soit avec la fille du frère de la mère, le mariage avec la fille de la sœur du père restant strictement interdit, la multiplication des termes de référence pour les degrés en cause est un signe de l'altération consécutive à l'endogamie partielle de moitié.

○ Pour l'interprétation du système, le lecteur voudra bien se reporter à la figure 48, qui demande un bref commentaire. Cette figure présente le système de parenté Aimol-Kuki sous une forme à laquelle nous ferons souvent appel pour d'autres systèmes, et (que nous nommons « modèle réduit ») Quand un système est si profondément altéré qu'il est impossible d'en donner une représentation diagrammatique cohérente, ou que les informations dont on dispose sont insuffisantes ou contradictoires, on peut toujours essayer d'en établir le modèle réduit, c'est-à-dire une représentation schématique satisfaisant à la seule condition que le plus grand nombre possible des acceptions de chaque terme corresponde au plus petit nombre possible de positions dans la structure. L'idéal — rarement réalisé pour tous les termes — étant que toutes les acceptions d'un terme donné répondent à une position, et à une seule. Il peut y avoir des positions différentes, si le même symbole désigne plusieurs types de parents, par exemple si la position « frère d'Ego » implique, tantôt le frère aîné, et tantôt le cadet, et si le sujet considéré est tantôt Ego féminin, tantôt Ego masculin. Nous distinguons alors la connotation du symbole par les signes > et < pour les aînés et les cadets, et — ou ( ) selon le sexe du sujet qui utilise les termes.

○ Le modèle réduit ne parvient jamais à donner une représentation complète du système : car dans ce cas, ce serait un modèle développé. Mais il est remarquable qu'un modèle réduit, bien construit, ne cesse de fonctionner que dans les zones les plus éloignées du centre de référence, c'est-à-dire de la position occupée par Ego. Dans ces zones extrêmes seulement, la nomenclature de parenté continue d'exiger, pour chaque terme, autant de

(1) J. K. Bose, Social organization of the Aimol Kukis. *Journal of the Department of Letters, University of Calcutta*, vol. 25, 1934, p. 1-9.

大規模な図表

大規模な図表

positions que d'acceptions. Dans chacun de nos modèles réduits, les « zones d'incertitude » sont représentées par des hachures. On trouvera plus loin une discussion théorique du procédé du modèle réduit (1). Nous nous contenterons, pour le moment, d'appeler l'attention du lecteur sur la méthode très simple qu'il offre pour interpréter la structure intime, ou archaïque, de systèmes difficilement accessibles.

⑤ Une tradition rapporte que les Tarau de Manipur sont originaires de Birmanie; ils se divisent en quatre lignées unies par une relation simple d'échange généralisé : un Pachana épouse une Tlangsha; un Tlangsha épouse une Thimasha; un Thimasha

Mais les véritables unités exogamiques sont le plus souvent de quatre ou cinq : l'ing eux-mêmes subdivisés en groupes dans les trois sections principales : patrilinéaires et patrilocaux, et le tainement, le plus fréquent, est la mère. La coutume était autrefois si cherchée une autre épouse, l'onch coups (1). Il est clair que la cous que la représentante la plus sal liée : en effet, quand le préten

331B このシステム (= Aimol-Kuki 族の親族システム) を解釈するためには、読者は、48図を参照していただきたいが、この図はト々註釈を要する。

第48図 Aimol Kuki システム (縮約モデル)。数字は, Bose (上掲書) の表に従う。

♂: 男性当人; 専ら男性の用いる呼称法には, 下線を付す。

(E): 女性当人; 専ら女性の用いる呼称法には, 括弧を付す。

記号>と<とは, 同一の親族関係を, 「年長」「年少」にしたがって区別するものである。

この図は, Aimol-Kuki 族の親族システムをあらわしているが, ここを使って  
いる形式で, 今後ほかのシステムをあらわすときにも, しばしば利用するとし  
よう。そこでこの形式を, 「縮約モデル」と名づける。システムが極度に変質  
を被ってしまっているため, 首尾一貫した図表に表示しようにも無理である  
と手にする情報が不十分だったり矛盾していたりする場合には, いった  
んそのシステムの縮約モデルを携えてみればよい。縮約モデルとは, すな  
わち, 各呼称のなるべく多数の意義を, 構造のなかのなるべく少数の位置に対  
応させるという条件だけを満足させるような, 図式的な表示である。理想的に  
は, あるひとつの呼称のすべての意義に対しては, ひとつの, としてただひとつ  
の位置が対応すればよいのであるが, すべての呼称について実際にそうなる  
ことは滅多にない。同一のシムボルがいくつかの親族型を指示する場合, たと  
えば, 「当人の男キョウタイ」の位置が, 父を台意したり弟を台意したりする  
場合とか, 当該の主体が女性当人であったり男性当人であったりする場合とか  
には, ある呼称は別々の位置を占めるかもしれないのである。そこでわれわれ  
は, 年長, 年少の記号>, <, また呼称を用いる主体の性別の記号 — 男性し  
( ) とも, 2, シムボルの台意を区別することにする。

331C 縮約モデルがシステムの完全な表示を与えるということは, ない, とい  
うのは, 完全な表示を与えるなら, それは展開モデルというものだろうから。  
けれども, 縮約モデルが, うまくつくられたなら, 準拠の中心するゆち当人の

占める位置から最も離れた区域以外のところで, 占めがうまくはたらくこと  
は, 驚くばかりである。中心から最も離れた区域でだけは, 親族名称法は,  
どの呼称にも, その意義と同じ数だけの位置をなお要求しつづける。われわれ  
の縮約モデルにおいては, この「不確定区域」は, いろいろ斜線を示される。  
縮約モデルの手続きについては, のちほど\* 理論的な検討をすることとし, さ  
しあたりには, 容易に手をつけ難かった諸々のシステムの, 奥深い始原的な構  
造を解釈するための, この見掛けよりずっと単純な方法に対し, 後述の注意を  
喚起することとしよう。

\* 第22章参照

[以上, 331B, 331C は, 邦訳495B に相当する部分の初版本の文章の, 誤記ある。なお,  
~~~~ 線は訂正が付した。]